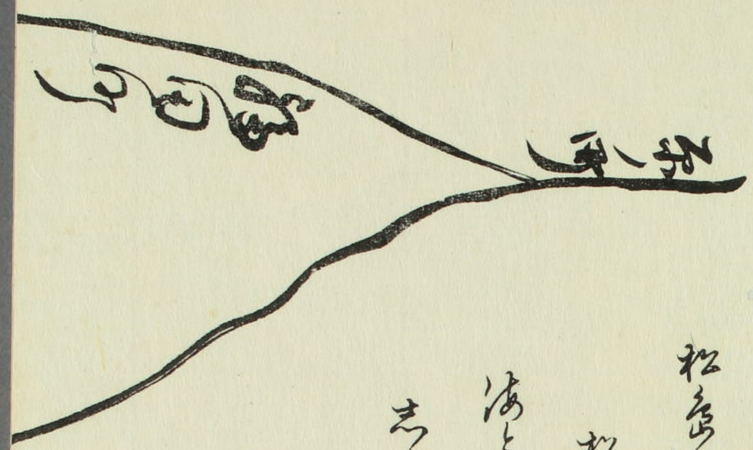
植継集

流芝編

弘化二年跋

二巻二冊

下巻欠



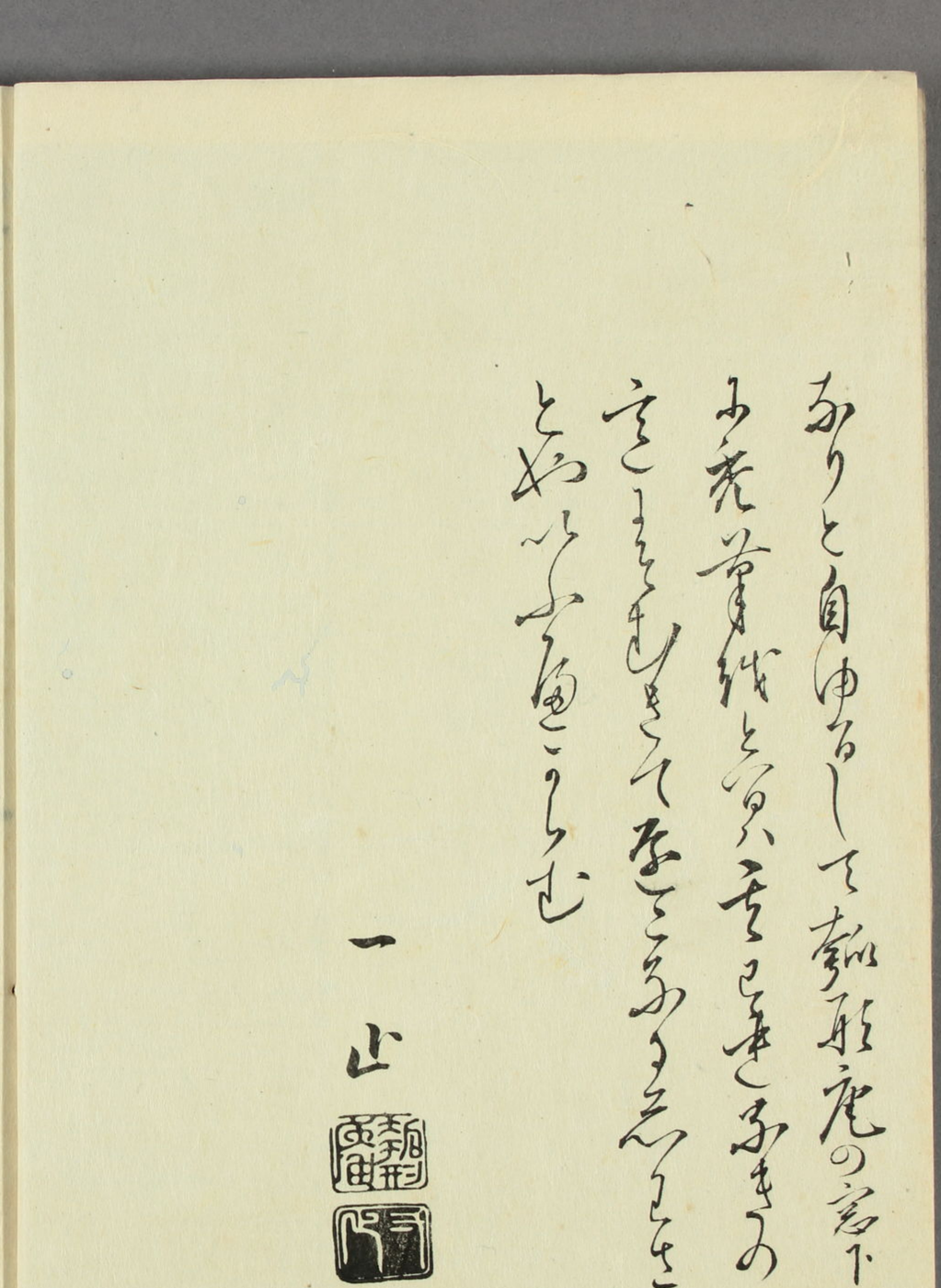
松島や鶴に身をかれ秋の月　翁

松島の雨や昔の雨を覚る　曾良

海とのみ詠めくらせし扇の芽、　丈芝坊

志ほらを拾ふ秋の雪、　雄湖

松島や一夜一夜の月　一止



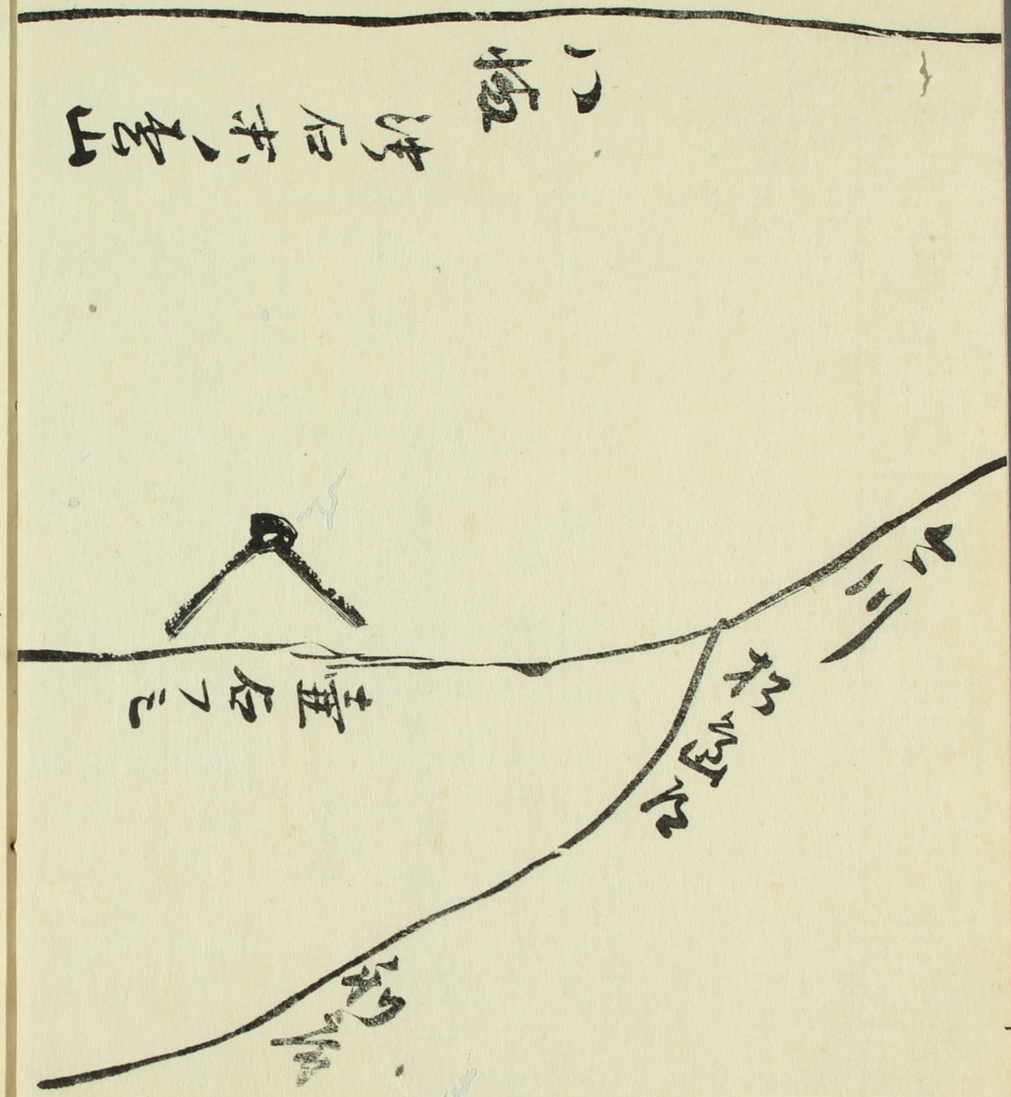
松島や鶴に身をかれ秋の月　翁

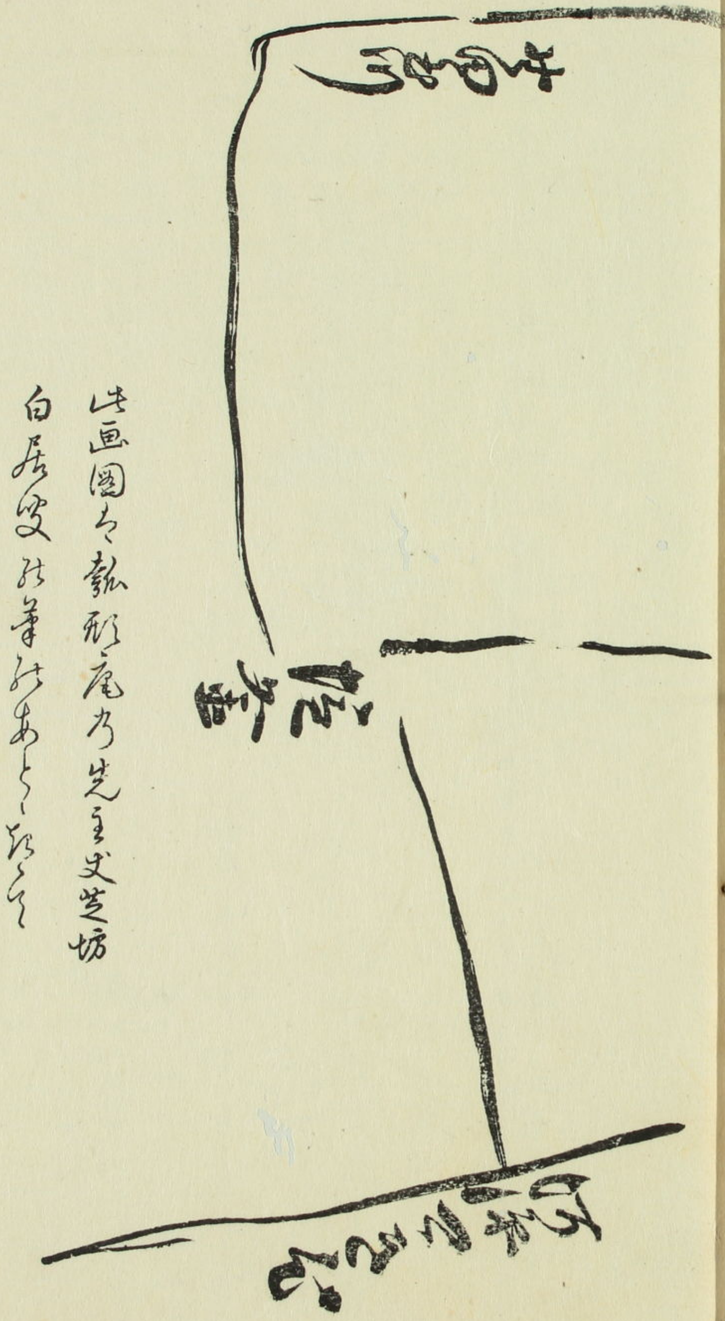
松島の雨や昔の雨を覚る　曾良

海とのみ詠めくらせし扇の芽、　丈芝坊

志ほらを拾ふ秋の雪、　雄湖

松島や一夜一夜の月　一止





宗鑑をさめ玉ふ所より波文
稜美をつゝ揃へ秩ひ目表
あるふて要害体く郭うち石乗
川の納涼社早元け秀青葉
澤山う魚等のをける鮎の乳の郷撰丘
ふ角力の場所も形孫色仙菜
ふ土俵あり東石陵竹

大へのそう引て見たる時う紙海釜
下うも坂を降くる毛の水連布
茶もりの奥てふ面積ひ一庭
陣の址花へ雑領くる五葉
右一順下畧

囲まれつゝ二ヶ立ちつゝ揚雲雀　仙車

人の住家をも見えぬ迄さくら　藻雪

日ざしをも防ぐまばらの竹の奇　琴丘

松うらや苔の中よりふき出る　朱芳

雪やちかうも来るを二ヶ所迄　一庭

雪影やまだ消残れの雪　波文

雪まちの女湯客の多き也　琴錦

雪をもて来る紅葉を錦る雪　稲居

梅が香や揉のうまき餅の味　菜岡

元日やとり一番の鳴うれし　利の助　五楚

鳴うれし雲うつゝやも垣間へ　魚石　右ニ稿

垣間へ魚もまもなくひこうかと　性一

人生てまたその年のあの時も　柳水　書ヲ

留まらんで庭生やまの月　朱石

向ひ温泉まで二里餘きくめる坂　籐雪
健ましくそゝり出て梅の香　雄角
遠くまで出て播そめる夕なり　帝幷
夢ぬきて水筋見ゆる新樹かな　梢古
葉屋のまゝ音てゐる炭俵　桐古
皆去りて額半ばあり冬ごもり　湫筌
鐘の巣も落てふけて淋きくり　寒馬
里数

降こみて白き夕や秋の橋　秋橋
山吹かゝりてあり簾の中　浣竹
吹角ぬて水のこまりや冬の月　唐雨
鮭風も紅足をあけ望山の麦　枝葉
月数下り筋もちて生ぬ月二青
穀一重ぬも水田やまる新月　石衆
今朝ぬ寒婦の傷やきりくぐす　梅史
鶏頭や一本日半ぬ人通り　左蓼

ちり拾ふまで拾ひもせぬ落葉かな　苔堺

かるくと白こつの上　三岳

人参や土降あり年玉雪　書初　貞山

向通ひしてゐる窓の双竹

夢茅舎前栽繁き猪水

奥山やいく束焼きし冬籠

茅葺や庭の面を掃き清め　親外

新屑の西を流るや春の雨　蚊丈

戸をさして石切おろすや春の月　九蘇

西行忌や数珠こぼるる女郎花　完伍

多け里と一夏もありし水行

木がらしやまさぐる西吟斎所

松杉の奥まで春の閻蓬亭

仕回しもまだ二日灸　雪斗

稲妻や雨をし　年々
五月雨や省五ゝ通ふ水かゝみ　松洲
あつさをて水鶏帰りし池の雨　甚業
山吹や皆ちりぬるを枝　杜水
忘こんて新斗里生を雑乳　抱宝
枝垂木よ雪て学社ちる音か　釜窓
下沈さゝて舟ゝ上るやさき小　東子
蒜やまゝて年ゝ新らしき　春芙

さゝらよき雪ふる音や秋　旦松
笠ゝて水もらぬ雨や　嵐牛
二日まもつゞく雨つゞき　錦河
居風呂へ入るまもなく　一鼎
水ゝ新ゝまゝて　ぬる水　甚篤
綿売をひけを告て百合の花　蝶江
笠や雨ゝ十ゝ　ぬる一　春
八朝やまゝ雨ゝ　一把　仙垂

常世ある宮ともえこそ猫の妻　南雄

裏ものや水かう声も多くあり　言峯

裏秋やまさき志そ一ありき照す　伯耳

住そそ降や茶山の初時雨　素荘

梅ふそ出来ふりや新生姜　如桃

町衆のえそそき杜鵑よき　抱布

路次口の蔵よめ里ふり蕎麦盛充

うちとけ一連斗あそりむさのう　山青

足袋投そ五そ初梅　素ふ

いけそふ自ふそ梅の元　伯玉

町並を抜けそ家あり大柳　守屑

井そや水引茶の水　麗々

匂ふ茶菓や松ふ下宗　作法　圭布

山里や不断ふ椿の話　屈跡　百良

芳野の桜

白川の古関

幕れそめそめそめの
衣装をあ〜なめ〜
皆原も杜も霞ち
夢とも霞さん〜
白剣も白も清
袖もふるも鈴

耕雲衆

浅香の沼

沼をあさくしも流すまで
ちるやそよめき乱れ来て枯れそくは
浦の暮る夜もつつまぬ蛍来
ふるふ小舟つまさぐまで

水雲やさゝぬ何をう
小堂もる沼の夕月一叢
醸醸法社きもあや酒もよ
沼で蒸た葉のめくある
葉桜もさゝの匂いのみのく
足てみるうもる山も降先

安志多良山

黒塚

二本松より遠き安積の原も一元
すみそめの木の下風も寒く吹
つるころ袖やまさて寺より大て
篠をうつ山おろし耳を打
まことや都を秋

苔の cloth 而きさき 表衣 流芝
曼陀羅 ゆく 舞 る 秋 東里
出代を 吟 社 言 て 鼎池
ぬるころ 苑 社 見 ころ 彩
衆 社 ら 衲 の 角 東 一旦
猫 手 返 ら 嵐 ま る 菜菊
業 地

信夫山

宵まつる角や寺町信夫山　流芝

砧のおと耳に頻るむら〳〵も　大蕨

嶺のも春雨を行あて　三平

佛上さを打とへまつる猶そて　桂舟

あちこちと舟とめひき来る土用干　素五

音を撲きまく〳〵の水　喜童

信夫ともち

ゆふ迄もなき石のまち也中々望まて
山深くあり田畑のまゝをあらしよ
里人のいとうやすき歩みを潜さま
実あり時の奥ふかくて五穀をうそこ
あの晃舒ふ心をなめしやまて

ともちより御寄句捨る名の霧　流芝
笠年　物ともせ鞋　野の　箕　守三
古社に詠をり多有の最明て　素湖
著あらふ年水汲うふ井戸　直枝
いさかふ蚕のうちを際の赤　等石
おもふ心のかなふ秋　青麦　一美

菖蒲松原

深雪を菖の松もろともに名利を捨て
慶喜のうち小筆を朝を志ひ
賢英侯部の仙客を訪ふ
易もと寄ふうそ物を四とふ
新西工人の涙を消し松を送る
いそ生きもむうと
名残をおくる出秋の感いふく深し

雲さそふ出秋の感菖松原寺流芝
面よ兎平あ生一豆畑雪阿
更て生る月を飛行の菖みて四教
眼鏡のさや社懐平鳴柳枝
庭まで銚をハ度くあり澤水
もらひ人社つくもる折社梅松署

道祖神

重陽の日神前より落葉暮雨史の日は
神よあ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
女　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
漂　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
せ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

清　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　流芝
清　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　江ニ
玉　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　柄笑
傷　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　三郎
聲　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　一由
直　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　泳村

宮媒酌

蘆澤の碑

研面圓相の内と梵黙の雅宇城頽千年文共に空
四界一行土字をあつまめ一界を手紀俗名を書き弘安
辛巳秋吉演之を殺没せり異蹟のむかしにあらずして
鐘今宝蔵寺に拝山佛之神法をも宝國慶光頂
人をして祖元と一國破と手来郭子鐘今ひてもまも
北條氏のすゑ小もりの夢井上頌と海鷹の風波を
ひろ称一と連そそもおも時世の有縁と
よりこも我あを捨ると学の好こえも
慢すあ里文を雅合と風語をものを亡魂を弔よ
文意をつと人をそ愛ひてあ研をそて
碑もとそかく字外字外雲ひてそ蒙古の
湖苑善提のあめ研文より甚神仏の奇特
あるをも見そ宝國のあらん

鈔月や船よ足つく秋の夢　流芝
旅をせうそ年やくれき京　燕山
木ざくらや柚を活きを引て　通山
机より下の蒼きおき　徐亘
鮫をみ先生性急おき　松濤
人事の務乃帰去世事　知休

来る松山

[illegible]
[illegible]
[illegible]

松金

軒端の梅

紅蓮尼と出家の素寒貧全く
和こうもしき坊主松為ま老てめで度狂ともと
ぬうまきハたとう者を取ままねこれを操
のいろふ朽もん我思ひて紀念の梅の傷ま
志ものいふふを物て其ひをゆら分く
世ゝ経ともふ孤形庵のう人一世の芳志也う
徳をつあ志の歌ふ別徳のいろ雪ちん

志ゝゝゝ記念ま梅ちつみちふ　流芝

いく秋ふうこ軒内霞雲　一止
地ゐゝの新芭ま自のみ折て　如泥
水波おと内いつもせゝき　羽人
物ま春夢の粘多新年の　二丘
煤ま紅酒てこ雪のちゝ　芭芝

途絶の橋

岩切村を貫川つゝみを
たゞ和くの細き十府の池を
走りて丸木橋をわたり土橋と
かよひさいつ降水の岸をあらそ
土嵩二て陸奥自由おこ生

水あふれ橋ながれて秋の風　流芝
つゝみの松のかげや月雨蒋
多賀お社壱ツ鎮のまをとめて後良
時雨初紅葉せしまおくの文居
何となく山ふところおこる村時雨史
紅葉ちる寒蒋菜蒋

黒羽の黒松

黒羽の領代浄法寺氏の祖室幸眺望年八ツ
社詠めある好景ありの程花をくめもの〻
そを頼と一句を乞い請て歌角うまる一事屋の
軒ちかき庭ちまでうつりて暴風基角あり
故換せう甚次四角のこ森をまる事よ

黒　松や　先々角ち　行逝変

松を黒う苔せて雪を志らく大雪の風恩を忘
まさるまでうつくしく法時法角ありと其松の
かちを文書う綴つ也表の其雪をものこ之宝
松の文書と号らるまでの物好ありけ

月雪や拿ま
庫　まるいもの
聖衆の世しま興ま
さうて　よとの
出る雪共松方ま
等をまるまで

流芝
庭乃冬枯　如星
つけて　大蝶
猪の通り　丁巳
ま流ま臺　甚笠
ものよ新
雄

宇都宮神社

豊城入彦命東國を治めたまふや二柱の神を二荒山の白松が峯にうつし祀らせたまふのち崇神天皇の御代に至りて四ツ峰と遷せありなほ今社地より旧地の山名をもて神号とし二荒山神と称したまふなりしをもて又元慶三年下野国の神と崇めたまふや又元慶三年将門滅亡せし時も此地の神の加護ありしとて正一位勲一等と授位の神階を奉りたまふとぞ其の社あまた今その宮ところ〳〵に祀る所八宇都の宮と称す是いにしへ二荒山と称したまひしをもて今又宮柱ふとしく再建あるものなりくてふたゝび神霊を仰きなむとて

別るゝ日の袂や冬木立　流芝

志川ゆく風も雲なき庭　其翼

先輩と一志ある物語して　梨長

もるゝ日のあや雪初　塵外

先ぶるふきてふ自の單　梅二

きる袖当き義と少新桐　籟仙

巴波川

栃木より驛の西を流れ、また栗橋を
めぐり利根川へ入る大河なり夜後
船の自由を得る商賣の舟利對岸をうるおす水
源ちかき山より流出ること久く田畑を
て旱魃の愁ひなく洪水の難もまぬかるゝ土
地の繁榮豊饒を全く此河伯の賜ならん

水をのう柏角をうつま川　流芝
日ぬるゝかすみ多社茅柳　雲岳
深鮒を焼音行あり行平たく　道雄
ちどりと發せる橋の落書　竹雨
あり合社筆跡もまた月の前　加洛
おくの里先立ア社まくら　華湖

天寂寺佛名會

凡夫罪障垢穢の身を百千劫を経て洗ふとも清めがたく唯神機清浄の水を以て衣生死業の垢を洗ふ時とゝもに無数億劫生死の罪を滅せんなほこの法仏の名を異口同音に唱へ敬礼する者その罪を殊勝と覚えて

おく霜のまき柱をみがく仏名会　流芝

撞木つく音も消ゆる鐘杜音　里雪

人も来る松もともしく枝たれて　珪葉

立ち去りがたき庭おも多し　梅山

古池もいま新池のうす氷月の照　李言彦

風吹けよふかくむしし　文蜂

越ヶ谷の梅園

砂地ながら低地なれば甲斐なし

とく梅を植てこそうらやの

貢物とせり花の頃を待人乃

心を勤一行脚みち〳〵梅見

ける事ゝ村里へ植足して果ん事

我ながらおろかなるねを

豊年ぶりや畠畑 流芝

加志川の岸 唐崎の 志一

鶯啼や藪 梅智て 春雪

ちる〳〵風の 吳水

時鳥宿貸ま〻有 雲皮

ちる〳〵風の 朱子

雲うち払ふ雪の夜を行きなやみて

嶺を越す鈴も凍るさ夜更けて

まれに鳥見おとすかうつせて囲炉裏を

村も静まり果てし里の夜の

まろうどもの寄りあひ居の

暮るるに等し戦き

鳥光　　暮池